

ダニエル書 - 第四十五号

象徴的変容：ダニエル書における「デイリー」の謎を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-01-09

ダニエル書の「日ごとのもの」は、ウィリアム・ミラーによって異教ローマ、すなわち異教の象徴であると認識されたが、終わりの時代においては、それはウィリアム・ミラーの基礎的真理の拒否の象徴である。これは、1863年に始まった反逆の終わりを表しており、その反逆は、レビ記二十六章におけるモーセの「七つの時」に関するミラーの理解を退けたことに端を発している。アドベンチズムが「日ごとのもの」を異教と正しく同定することを拒んだとき、彼らはサタンの象徴をキリストの象徴へと変えてしまった。イザヤは、この業が物事をひっくり返すものであったと指摘している。「日ごとのもの」の拒否は1930年代（アドベンチズムの第三世代）に確立されたが、それは1901年（アドベンチズムの第二世代）以来の論争であった。古代イスラエルと同様に、真理の漸進的な拒否は、赦されざる罪の要素を含む誤りの受け入れへと導いた。

詭弁を弄するユダヤ人にとっての赦されない罪は、彼らがキリストの行ったわざをサタンのわざだと見なしたときに示された。古代イスラエルは現代イスラエルの主要な象徴であり、現代イスラエルはまさにそれと同じことを、ただ逆の形で行った。彼らはサタンのわざ（異教）をキリストに帰した。古代イスラエルの反逆には、サタンを自分たちの王として選んだことも含まれている。

そこでピラトはその言葉を聞くと、イエスを外に連れ出し、「敷石」と呼ばれる場所、ヘブライ語では「ガバタ」と言う所の裁判席に座った。それは過越の準備の日で、およそ第六時ごろであった。彼はユダヤ人たちに言った、「見よ、あなたがたの王だ。」しかし彼らは叫んだ、「殺せ、殺せ、十字架につけろ。」ピラトは彼らに言った、「私があなたがたの王を十字架につけるのか。」祭司長たちは答えた、「私たちにはカイサルのほかには王はありません。」そこで彼はイエスを十字架につけるために彼らに引き渡した。彼らはイエスを引き取り、連れ去った。ヨハネによる福音書19章13-16節。

ピラトは異教ローマの代表者であり、ホワイト姉妹は、黙示録第十二章で天から追い出された竜はサタンであると特定しているが、副次的な意味ではその竜は異教ローマでもある。したがって、竜は「the daily」によって象徴されている。古代イスラエルの反逆の終局は、彼らが公然と「私たちにはカイサルのほかには王はない」と宣言したときであり、それは彼らが自分たちの王の臣民であること、そしてその王がサタンであることを公に表明したことを意味していた。王としての神に対するその反逆は、預言者サムエルの時代に始まり、彼らが神を自分たちの王として退け、ほかの諸国民のようになるために人間の王を与えるよう要求したときに始まった。

そのとき、イスラエルのすべての長老たちが集まり、ラマにいるサムエルのもとに来て、彼に言った。「ご覧ください、あなたは年老いておられ、あなたの息子たちはあ

なたの道を歩んでいません。今、すべての国々のように、私たちを裁く王を私たちに立ててください。」しかし、彼らが「私たちを裁く王を与えてください」と言ったことは、サムエルの気に入らなかった。そこでサムエルは主に祈った。主はサムエルに言われた。「民の言うすべてのことに聞き従え。彼らが退けたのはあなたではなく、私が彼らの上に王として治めることを、彼らは私を退けたのだ。私が彼らをエジプトから連れ上げたその日から今日に至るまで、彼らがしてきたすべてのわざ、すなわち私を捨ててほかの神々に仕えてきたとおり、彼らはあなたに対してもそのようにしているのだ。」サムエル記第一 8:4-8。

古代イスラエルは、自分たちが神を退けていたことを決して認めず、地上の王を求める願いがやがてメシアを十字架につけ、サタンを自分たちの王に選ぶところまで進むことにも気づかなかった。彼らの反逆は、神を拒みながらもなお自分たちは選ばれた民だという自己義的な観念によって彼らの目から覆い隠されていた。というのも、結局のところ、サムエルの後でさえ神は聖なる預言の務めを保っておられるのだ、と彼らは理屈づけていたからである。

彼らは、神の預言者の存在が自分たちこそ神に選ばれた民である証拠だと信じ、預言者の務めを取り違えていた。自分たちが神から遠く離れており、預言者たちが彼らを神へ立ち返らせようとしていることに気づかなかったのである。というのも、彼らは預言者たちの働きを神の導きの証として解釈していたからだ。自分たちに送られた預言者たちのすべてのメッセージを拒み続けていたにもかかわらず、である。同じ欺きが1863年にアドベンティズムを襲った。

アドベンティズムは、ウィリアム・ミラーの宣教によって結集した運動を退け、また、エリヤ（ウィリアム・ミラー）によって伝えられたモーセの「七つの時」のメッセージを退けたのと同じ年に、法的に登録された教会となる道を選んだ。同じ年に、偽の預言図表も作成したが、それはもはやそれ自体では読めず、説明のための配布資料を必要としたため、ハバクク書2章3節にあるとおりに「語る」こともできなかった。ハバククの図表は、そのままの状態で読むことができたので、「語る」ことができた。

アドベンチズムは、1863年に自ら下した選択について一切の自己検証を行うことを拒んだ。というのも、彼らの中には女預言者がいて、それが自分たちこそ黙示録において預言の霊を持つ残りの民として特定された民であることの証拠だと考えていたからである。彼らは古代イスラエルと同じ精神と態度を示し、ミラーによって発見された最初の宝玉を拒絶したことから始まった反逆は、最終的に「the daily」という宝玉に関するミラーの同定さえも拒絶するに至った。

現代イスラエルは、「the daily」は異教ローマの象徴であり、その異教ローマはさらにサタンの象徴でもある、というミラーの理解を退け、「the daily」はキリストの象徴だと主張した。言い換えれば、現代イスラエルはサタンの象徴をキリストの象徴として受け入れることを選んだ。ちょうど、古代イスラエルが、サタンの象徴である異教ローマの代表であるカエサル以外には王はいないと宣言したのと同様である。

預言的な適用という観点から言えば、その選択によって、現代のイスラエルは、まさにウライ川によって表され、ミラー派の歴史における知識の増加であったダニエル書第7章

・第8章・第9章を再定義しなければならなくなった。彼らはそれらの章を変更せざるを得なくなる。というのも、第8章は「the daily」に直接三度言及しているからである。

ウライ川の幻の封印が解かれたという歴史に強いられて、ミラー派は、ダニエル書2章に表されているように、キリストが再臨してその永遠の御国を打ち立てられるまでのあいだ、他の地上の王国は存在しないと見なした。ゆえに彼らは、ローマの第四の王国を二つの側面をもつ一つの王国として扱った。その二つの側面は、ダニエル書7章と8章に直接示されている。ダニエルは、彼が8章で受けた幻が7章の幻と関連づけて理解されるべきであることを明らかにしている。

ベルシャザル王の治世三年に、最初に私に現れた幻の後、私ダニエルに再び幻が現れた。ダニエル書 8:1.

ダニエルに「最初に」「現れた」幻は、第七章の幻であった。

バビロンの王ベルシャザルの治世の第一年に、ダニエルは寝床で夢と頭に浮かぶ幻を見た。そこで彼はその夢を書き記し、その事柄の要点を述べた。ダニエル書 7章1節。

二つの幻は、ダニエル書2章で最初に示された、聖書の預言における諸王国の二つの側面を表している。バビロン、メディアとペルシア、ギリシア、ローマの四王国は、7章で繰り返され、さらに8章でも再度取り上げられるが、そこでは四王国の政治的要素と宗教的要素が区別されている。ダニエル書7章では、これらの王国は猛獣によって表されているが、8章では同じ王国が聖所の獣によって示されている。ダニエルは7章の幻を理解したいと願い、ガブリエルが彼に説明するために来た。

この私ダニエルは、身のうちの霊が憂い、頭に浮かんだ幻に心を騒がされた。私はそばに立っていた者のひとりに近づき、これらすべてのことの真実を尋ねた。すると彼は私に語り、これらの事の解き明かしを知らせてくれた。これらの四つの大いなる獣は、地から起こる四人の王である。しかし、いと高き方の聖徒たちは国を受け取り、その国をとこしえに、世々限りなく所有する。ダニエル書 7:15-18

ダニエルは、四つの獣は、神のとこしえの御国が打ち立てられるまで存在する四つの地上の王国であると告げられた。これはダニエル書第2章と一致している。神のとこしえの御国の到来に先立って四つの地上の王国があるとされ、その御国は第2章で山から切り出されて全地を満たした石によって表されている。

シスター・ホワイトは、黙示録13章の地から上ってくる獣に言及したとき、その四つの王国に関するミラー派の理解を、ミラー派の従来のをはるかに超えて発展させた。

ここで、もう一つの象徴が導入される。預言者はこう言う。「私は、地から上ってくるもう一つの獣を見た。それは小羊のような二本の角を持っていた。」11節。この獣の外見とその台頭の仕方の両方が、それが象徴している国が、先行する象徴のもとで示されたものとは異なることを示している。世界を支配してきた大いなる諸王国は、預言者ダニエルに、「天の四つの風が大海の上で争った」時に起こる猛獣として示された。ダニエル書7:2。黙示録17章では、天使が、水は「民、群衆、諸国民、諸言語」を表すと説明している。黙示録17:15。風は争いの象徴である。天の四つの風が大海の上で争うさまは、諸王国が権力を獲得してきた征服と革命の恐るべき光景を表している。大

いなる論争、439.

獣は、諸王国が台頭する過程で成し遂げられた征服の象徴である。猛獣は、預言的には、王国の政治的・経済的・軍事的な力を表す。ダニエル書2章と7章に描かれているのと同じ王国は8章にも描かれているが、そこではそれらがすべて神の聖所に由来する要素と結びつけられており、そのことによって諸王国の宗教的要素を表している。というのも、それらはすべて教会と国家の結合であったからである。

ベルシャツアル王の治世第三年に、初めに私に現れたものの後、私、ダニエルに幻が現れた。私は幻の中で見た。見ると、私はエラム州にあるスサの宮殿におり、さらに幻の中で、ウライ川のほとりにいた。そこで私は目を上げて見ると、なんと、川の前に二本の角を持つ一頭の雄羊が立っていた。二本の角は高かったが、一方はもう一方より高く、その高い方が後に生えた。私はその雄羊が西へ、北へ、南へと突き進むのを見た。これに立ち向かえる獣は一つもなく、その手から救い出す者もいなかった。彼は自分の思うままにし、勢力を増した。私が思い巡らしていると、見よ、西の方から一頭の雄やぎが地の全面を行き、地に足を触れずに来た。そのやぎの目の間には著しい一本の角があった。彼は、私が川の前に立っているのを見たあの二本の角のある雄羊のところに来て、その力の激しさをもって彼に向かって突進した。やぎが雄羊に近づくのを私は見た。彼は彼に対して激しい怒りに燃え、雄羊を打ってその二本の角を折った。雄羊にはこれに立ち向かう力がなく、彼は雄羊を地に投げ倒して踏みにじった。雄羊を彼の手から救い出す者はひとりもいなかった。こうしてその雄やぎは非常に大きくなったが、彼が強くなったとき、その大きな角は折れ、その代わりに、天の四方に向かって四本の著しい角が生えた。ダニエル書 8:1-8.

第八章は、ダニエルが自分は聖書預言における第一の王国（バビロン）の歴史のただ中に生きていると明言するところから始まるが、彼の見た幻はバビロンを表すいかなる象徴も示していない。というのも、それは第二の地上の王国であるメディアとペルシャを表す雄羊から始まるからである。バビロンの象徴が欠けているのは意図的である。というのも、バビロンの主要な特質は、取り去られ、その後回復される王国を表していることであり、それはネブカドネツアルが「七たび」の間、獣として生きたことによって表されているからである。その「七たび」の間には、霊的バビロン（教皇制）の要素が示されている。というのも、教皇制は、象徴的な七十年のあいだ忘れ去られていた王国であり、その期間に致命的な傷を負っていたからである。ダニエルが「ベルシャツアル王の治世三年に」その幻を受けたと明記しているという事実は、バビロンが第二の王国であるメディアとペルシャに先行する王国であることを示すが、同時に、バビロンを、ひとりの王の治世の日々のあいだに忘れられている、隠れた、すなわち忘却された王国として強調している。

第八章の獣たちは猛獣ではなく、聖所の奉仕でいけにえとして用いられた動物である。第四の王国は獣としてではなく「小さな角」として表されているが、角は神の聖所の一部であった。というのも、神の聖所の祭壇には、その設計の一部として角が備えられていたからである。

ダニエルが予言の四つの王国を聖所の用語で表しただけでなく、その章の叙述には、神の聖所奉仕から直接由来する語がいくつも含まれている。その章の物語は、聖所奉仕に由

来するヘブライ語の語を用いて示されているだけでなく、聖所奉仕における供え物の奉獻という行為そのものが、章の構造の中に組み込まれている。ダニエルが意図的に第7章と第8章を結びつけたという事実は、見ようとする者には、第7章が聖書の予言における諸王国の国家統治を、第8章が聖書の予言における諸王国の教会統治を、それぞれ特定していることを示している。

アドベンチスト派は、この事実をサタンの作り話で覆い隠さざるを得なくなった。というのも、この認識は、ミラーの宝石が神が意図したとおりのものであったことを明らかにするからである。彼らがミラーの「the daily」の理解を退けることは、「神には理解がなかった」という主張に等しい。なぜなら、神が（聖なる天使たちの働きを通して）ミラーにその枠組みを与えたとき、それは正確ではなかったと彼らは主張するからである。

まことに、あなたがたが物事を覆すことは、陶工の粘土と見なされよう。なぜなら、作られたものがそれを造った者について「彼は私を造らなかった」と言うだろうか。あるいは、形づくられたものがそれを形づかった者について「彼には知恵がない」と言うだろうか。イザヤ書 29:16

ミラーの枠組みは、彼が認識し用いた預言的構造であった。しかし1863年以降、アドベンチズムは、ミラーの夢の宝石を覆い隠すために、背教したプロテスタント主義とカトリックの神学的適用へと回帰した。アドベンチズムは、そのわざとそのわざの造り主を退けるために、偽りの枠組み（作られたもの）を受け入れた。そうすることで、彼らはそのわざの造り主には理解がないと主張している。その枠組みを拒否することは、1798年に封印が解かれた知識の増加を拒むことであり、当時も今も変わらない。知識の増加を拒む者は、そのわざとそのわざの造り主を拒む者であり、ダニエルの言葉で言えば、彼らは「悪しき者」であった。

多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには悟る者はいない。だが、知恵ある者は悟る。ダニエル書 12:10

「悪しき者は悪しきことを行う」。それによって、真理に対する次第に激化していく拒絶が示される。悪しき者たちによるその枠組みの拒絶は神への拒絶であり、そして神は、偽の枠組みを用いて行おうとするその拒絶のゆえに、悪しき者を退ける。

わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしもあなたを退け、あなたをわたしの祭司とはしない。あなたが自分の神の律法を忘れたので、わたしもあなたの子らを忘れる。ホセア書4章6節。

1844年から1863年にかけて神の「祭司」であった神の民は、ウィリアム・ミラーの働きを通して増し加えられてきた「知識」を欠いていたため、退けられた。ホセア書の6節の文脈を考慮することが重要である。というのも、その文脈は、「知識」として表されている真理に対する反抗がエスカレートしていくことを示しているからである。

イスラエルの子らよ、主の言葉を聞け。主はこの地の住民に対して訴えを持っておられる。この地には誠実も、慈しみも、神を知る知識もないからだ。呪い、偽り、殺し、盗み、姦淫が横行し、彼らは節度を破り、流血が流血に続く。それゆえ、地は嘆き、その中に住む者は皆衰え、野の獣も、天の鳥も、海の魚もまた取り去られる。しかし

、だれも争うな、だれも他人を咎めるな。あなたの民は祭司と争う者のようだからだ。それゆえ、あなたは昼に倒れ、預言者もまた夜にあなたと共に倒れ、わたしはあなたの母を滅ぼす。わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしもあなたを退け、わたしのための祭司としない。あなたがあなたの神の律法を忘れたので、わたしもあなたの子らを忘れる。彼らが増えるにつれて、わたしに対して罪を犯した。それゆえ、わたしは彼らの栄光を恥に変える。彼らはわたしの民の罪を食い尽くし、その咎に心を向ける。こうして、民も祭司も同じになる。わたしはその道のゆえに彼らを罰し、その行いに応じて報いる。彼らは食べても満ち足りず、姦淫しても増えない。主に心を留めることをやめたからである。

淫行と酒と新しい酒は心を奪う。わたしの民は自分たちの木に助言を求め、彼らの杖が彼らに告げる。淫行の霊が彼らを迷わせ、彼らは自分たちの神のもとから離れて淫行に走った。彼らは山の頂でいけにえをささげ、丘の上で香をたく。樅やポプラやニレの木の下で、それは行われる。その陰が良いからだ。ゆえに、あなたがたの娘たちは淫行を行い、あなたがたの妻たちは姦淫する。あなたがたの娘たちが淫行しても、あなたがたの妻たちが姦淫しても、わたしは彼女たちを罰しない。というのも、彼ら自身が娼婦と交わり、遊女と共にいけにえをささげるからだ。ゆえに、悟りのない民は倒れる。たとえイスラエルよ、お前が淫行しても、ユダは罪を犯すな。ギルガルに行くな。ベテ・アベンに上るな。「主は生きておられる」と誓うな。イスラエルは背く雌牛のように後退している。今、主は彼らを広い所で子羊のように飼われる。エフライムは偶像に結びついている。彼をそのままにせよ。彼らの飲み物は酸っぱくなった。彼らは絶えず淫行を重ねた。彼らの支配者たちは恥をさらして、「よこせ」を愛する。風がその翼の中に彼女を包み込み、彼らはいけにえのゆえに恥を見る。ホセア書 4:1-19。

ホセアの警告は、「この地には真実も、あわれみも、神を知る知識もないゆえに、主はこの地の住民を訴えておられる」ということである。アドベンティズムは終末の神の民である。塵を払う男がミラーの部屋に入るその日、民も祭司も預言者も含むアドベンティズムは、「悟らない者は倒れる」。彼らが「偶像に結びつく」からである。彼らの偶像とは、偽りの枠組みに織り込まれた偽りの教理である。

知識の増加を拒むことによって示される反逆は、段階的にエスカレートしていく反逆であり、ついには、ミラーの部屋から掃き出された偽りの教義に彼らが結びつけられると宣告され、それとともに彼らの猶予期間が終わる地点にまで至る。彼らの反逆は、絶えず姦淫を犯すこととして表される。1863年以降、猶予期間の終わりに至るまで、彼らは絶えず反逆を続け、主の口から吐き出されるに至る。

知識を拒絶する反逆は、彼らが「絶えず」姦淫を犯していたことで示されており、同じヘブライ語ではないが、その意味は「継続的」を意味するヘブライ語「tamid」と同じで、これはダニエル書では「the daily」と訳されている。

次の記事で、聖書預言における四つの王国の学びを続けます。

それから私は、『Daily』に関して、『sacrifice』という語は人間の知恵によって補われたものであり、本文に属するものではないこと、そして主はその正しい見解を「裁きの時の叫び」を上げた者たちにお与えになったことを見た。1844年以前、一致があった時には、ほとんどの者が『Daily』についての正しい見解で一致していたが、1

844年以後は混乱の中で他の見解が受け入れられ、闇と混乱が後に続いた. Review and Herald、1850年11月1日.